

安谷屋 正義展

その表現と思想

上原 誠勇

■中



うちはら・せいゆう 1947年南風原町生まれ。画師沖縄代表、貸し画廊が主流だった81年から主体的に作家プロデュースを行う企画画廊を創立し今日に至る。

これまで代表作の「塔」や「望郷」「滑走路」はたびたび見る機会があった。今展では初期の「サイナー」を志していたころのクリスマスカード(46年)や、画面が「面」を固め美術科「二シムイ」にアトリエを構えた48年以降の具象画「中城より西原を望む」(50年)、画面がフォービスム風に変化した始める「黄色い菊」(53年)、戦禍の現実社会を眼差した「弾痕」(同)など、目にする機会が少なかつた作品も展示され、伝説化した画家の出発点を見る思いだ。

戦後美術けん引

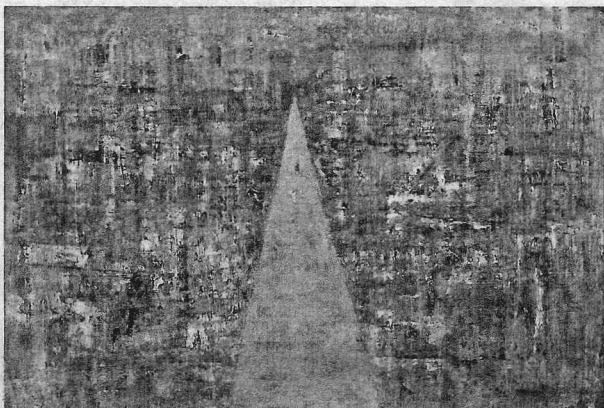
戦後の間もないころ、沖縄の美術界は具象から抽象へ展開を模索した時代であった。その中心人物が安谷屋正義である。理論家の安谷屋は保守的な先輩画家たちとの論争や確執もあったと聞く。50年に立ち上げた「五人展」(54年に解散)においては切磋琢磨

新時代の造形芸術探求

内面と「沖縄」重ねて問う

の画家たちと絵画におけるロ—カル性や文学性、造形論、リアリティー論を交えたことがうかがえる。

さらに「ブラックやピカソのキュービスムを想わせる」「



安谷屋正義作「道」(1967年)

ンボンション」(56年)など、あの削ぎ落とされた安谷屋独特の画面の背後に、西洋近代の文脈を真剣に学んだ痕跡を残したのは興味深い。同年に制作された「新世紀」一起重機は色彩も豊かで力強いフォルムの画面構成の作品である。戦後社会の復興への前向きな強い意識が読み取れる。

しかし、その傍らで拡大する米軍基地に視線を向け、その存在を問いかけるような作品「柵」(56年)を描いている。その翌年の作品「建設」から色彩を限りなく抑え、灰

自立へ強い意志

戦後13年、安谷屋37歳。画家安谷屋の胸中に去来したも

のはまこと「塔」(58年)に修練され結実したといふきだろ。鋭くやわらかく垂直に立つ精神、自立(自律)への強い意志(象徴(像)でもある。低い地面から中央に天まで届く中心線、シンメトリーな構図。描くことへの「と」何度と線(線)返し、その孤高な精神の営みが十分すぎるほど伝わってくる。創造する情熱と苦しみ、官能的な色彩を削ぎ落し「求道者」のような禁欲的な知性、妥協を許さない思想家の精神に触れるようである。

以後の「港」(60年)、「残照」(61年)などの作品に見られるように、画面に色彩を取り戻しながら、一方で「塔」の背景にある寂寥感が漂う白色を基調に「白基地」(61年)を制作。「滑走路」(63年)は「ほろほろたる」一種の虚無感をたたえた空間、それが沖縄の現実：「(63年12月)沖縄タイムス掲載、東京フオルム画廊の個展を終えての記事より」と米軍統治下の沖縄の空気を述べている。さらに「誘導路」(64年)と、米軍基地「シーナ」を制作し、米軍のベトナム空爆と同時期に描かれた傑作の「望郷」(65年)を生んだ。戦前の鬼畜米英の思想と国民化教育を受けた兵士安谷屋の過去と、戦後の自身を重ねたと想われる作品である。戦場へ赴く兵士の孤独感、米兵を一人の人間として受け入れ、人間愛に満ちた詩情あふれる作品を生み出している。

厳しい時代直視

紙幅がないのでその他には

触れるとができないが、安谷屋は戦後の厳しい時代に生きた。だからこそ、現実社会を直視し、ボンティブなリアリストであり続けた。画面に漂う孤独と寂寥感からネガティブな悲観論者に見えらえてしまいがちだが、決してそうではない。新しい時代の造形芸術を探求するモダンリストの画家だったといえよう。彼の死後半世紀近い時間がたつた。しかし、沖縄の現実は変わらない。むしろ米国と日本の軍事的植民地化が強化されている。安谷屋が生きていたから今年90歳。この沖縄の状況をどのように解釈し、表現したであろうか。「ちつとも変

わつてないじゃないか、ちなんちゆよゆーかんけーりよ」とあの世から声が聞こえてきそうだ。

最後に、絶筆「道」は画家安谷屋の創造する厳しき、妥協をゆるぎない精神が具象と抽象の間で「これから何処へ行くのか?」。自らの内面と沖縄の社会状況を重ねるよう問いかける。あれほどまでに、ストイックに画面を追求してきた安谷屋は、死去した年、何かを感ぜたかのよう「具象画の清楚な菊の花」とカーネーション「花」(67年)、そして「おもむろに心の奥を眼差す妻鏡子の肖像を描いている。